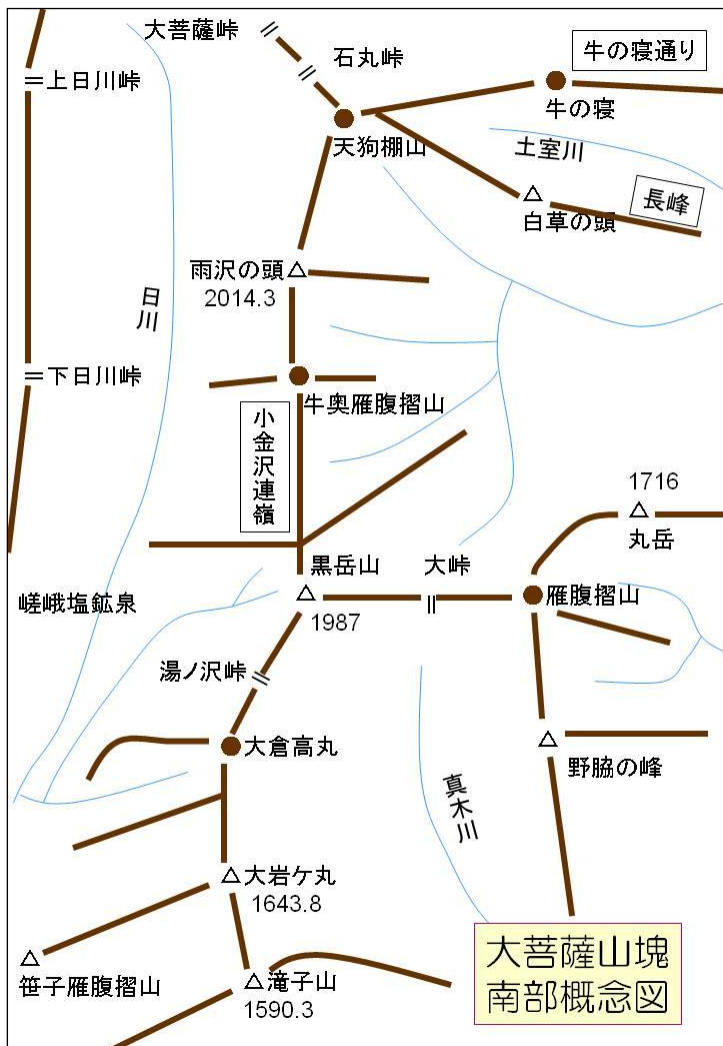


大菩薩	小金沢連嶺縦走	No.042
-----	---------	--------

冬の大菩薩に二度足を入れたからには、この小金沢連嶺を見逃してはおけない。この長々と横たわる尾根は、南北20Kmの大菩薩山塊の主たる存在である。(と私は思っている)



昭和40年2月27日(快晴)
 全共連での土曜日の半ドン勤務が終わった後、新宿駅に直行し、12時45分発に乗車。塩山15時30分、5分の待ち合わせで裂石行のバスに乗ることができた。(45円)
 裂石16時15分、歩き出す頃はもう日も暮れがちの頃。日没後の冷え入るような寒さの中を上日川峠へ向かう。峠着は18時、慣れた道で長さを感じない。
 大菩薩館着18時15分、もう真っ暗で冬の夜のしつこいような冷たさが体を包み始めている。すでに先客が2名炉端で世間話をしている。すぐに夕食。フランスパン、ソーセージ、バター1/8ポンド、ポタージュスープ。
 小屋の外は黒い幕を下ろしたようで、ガラス戸に映る自分の顔が炎に浮き出されて不気味に揺れている。(素泊350円)

昭和40年2月28日(快晴)
 起床5時20分、朝食(ラーメン2ヶ、ソーセージ、センベイ、バター少々)。
 6時45分に出発。石丸峠、冷たい風が吹き付けるので長くは居られず。何度も歩いた慣れた道だが、慎重に歩を進める。

天狗棚山8時05分、スパッツを付けて小休止、8時20分出発。いよいよここから小金沢連嶺に突入。雪は充分にあり、スパッツに感謝するという表現がピッタリだ。
 小金沢山は双耳峰で北峰(2014.4m)に三角点がある。の第二ピーク(南峰2009m)で小休止のあと雨沢の頭(2014.3m)9時28分。ここは大菩薩山塊中の第二の高峰。行く手にシンメトリーに立つ富士山が素晴らしい。その素晴らしさは、小金沢南山稜の黒木に覆われた山容の上に白く飛び出しているゆえであらう。吉田大沢が4:6に分けて、空には一点の雲もない。
 しばし富士を眺めて9時45分に出発
 牛奥雁ヶ腹摺山(1990m)10時17分、奇妙な名前の山であるとともに、なんとも牧歌的な名ではないか。雁ヶ腹摺山は大菩薩山塊にはいくつかある。笹子雁ヶ腹摺山、雁ヶ腹摺山、それに牛奥雁ヶ腹摺山。約千年の昔、中国の「平妖伝」によれば、「双耳の頂の峰と峰の間を秋になると雁が越えてゆく。里人はこれを見て雁門山と名付けた」とあり、また「甲斐国志」の四尾連湖(しびれこ)の項に「雁、鴨等の水鳥が昼は湖に遊び夜は水田にえさを求め、明け方になると飛び去って行く。山上に雁門あり、どの鳥も疲れて腹を摺るように山を越えていく。獵師は雁門に網を張ってこれを捕らえた」とある。大菩薩の北に位置する奥秩

踏み跡 < My mountains >

父にも雁坂峠、雁峠という名が見られるし、これら「雁」と名のつく場所を地図上にプロットするとほぼ一直線上に並ぶことから、渡り鳥の通り道になっていたこともうかがえる。

川胡桃の頭10時55分、11時55分まで昼食と大休止。そして稜線をさらに南へ。稜線の西側は風当たりが強いが、東側は日当たりもよく春のような暖かさ。

黒岳山12時35分、1987mで一等三角点を有する山。黒々と木に包まれたその名のとおり山。東に大峠を挟んで五百円札の裏側の富士山の撮影場所である有名な雁腹摺山。

黒岳山から南へ30分ほどの白岩ヶ丸(シロヤガマル)は黒岳山とは対称的に木の一本もない草原のようなピークで眺めも良い。13時05分着。頂上に小さな岩塊がある。これが山名の由来だろうか。

枯れ草の草原は湯の沢峠まで連なり、富士は一層近くに眺められる。

湯の沢峠(ゆのさわとうげ:1650m)13時30分、ボロ小屋があるが冬は水が涸れてしまうようだ。峠から凍結した焼山沢に入り、田野鉾泉へ下山。足下を流れる日川の瀬音は、武田家五百年の最後を飾った勝頼にまつわるいくつかの伝説を秘めて静寂そのもの。

景德院の立派な山門を見送り30分ほどで初鹿野駅に着いた。ところが、タッチの差で16時33分の列車に乗れず、次の17時13分発の臨時列車まで約40分待つことになった。新宿駅に20時09分に帰着。



小金沢連嶺の縦走第一回目は湯ノ沢峠までで終わったが、滝子山までの南部縦走が次の課題として残った。

武田家の最後、壬午の乱、田野合戦などの伝説を尋ねて、勝沼から初鹿野、田野、天目山と日川の流れを遡り嵯峨塩鉾泉に泊まり大菩薩に至るという山旅なども面白いかもしれない。

<左写真>雨沢の頭にて富士を眺めてひとやすみ
以上

●雁ヶ腹摺山

通常「雁腹摺山」と書くことが多いが、日本山名事典の表記にあわせて「雁ヶ腹摺山」とした。

また牛奥雁腹摺山も同様に、日本山名事典の表記にあわせて「牛奥ノ雁ヶ腹摺山」とした。

「牛奥ノ」は「笹子雁ヶ腹摺り山」と同じように、場所を示すものと言われている。

正しい読みは「がんがはらすりやま」

(修正・更新:2023年10月)